

ちんすこうりなの循環運動 または円環運動について

ヤリタミサコ

『女の子のためのセックス』という詩集タイトルは、確かに刺激的だ。だが、よく考えてみると、セックス＝性行為ではない。sexという英語は、一般的には男女の性別のこと。もともとはラテン語のsexusで、分割という意味だと辞書に書いてある。詩集タイトルは、もちろん性行為（sexual intercourse）の意味だとわかるが、英語のintercourseは、まじわるという意味。私はこの詩集を読んで、分割された2つの性がまじわり、また分割へ戻り、またまじわることを繰り返していく、という循環を思った。どこか遠くに仏教的世界観を感じつつ。

いくつかの作品をピックアップして、その循環運動または円環運動を見てみたい。まずは「螺旋階段」。このラスト3行に仰天した。1984年のニコラス・ケイジ出演の映画「バーディ」を連想する。この映画のラストシーンは、ビルの高い屋上から二人の青年が飛び降りて、観客がキャー！と思ったとたん、二人の青年は、屋上から地上ではなく、ほんの1メートルくらい下の屋根に着地していた、というシーン。

上り続けるだけなんだ
ひとりなんだ
ずっと
これからもずっと
ひとりで
（略）
飛び降りてやる
そしたら
そこが
一番上

飛び降りることが、脱落でも切断でも逃亡でも失意でもなくて、「一番上」というドンデン返しの発想。螺旋階段は、円を描きながら閉じることなしに上昇し下降する。直線的な階段では、上下はすぐに見通せる。が、円が重なって見える螺旋階段は曲線の連なりなので、上下は見えにくい。「飛び降りる」とは、螺旋階段内で螺旋階段内に着地することか？ それはかなりむずかしいから、きっとそうではない。螺旋階段は非常口などに使われるから、螺旋階段から飛び降りるとは、どこか隣のビルの屋上だったり、隣の家の屋根なのかもしれない。だから、「そこが／一番上」と言えるのか。などと螺旋状に考えていると、うねうねと目が回ってくるような気がする。確信を持って言えるのは、螺旋階段が終わりのない循環運動であるのに対して、飛び降りるのは、思い切りのよい直線運動。女と男の性行為運動を連想させ、そのくせ「ひとり」を2度繰り返している孤独。孤立ではなく、孤独だと思う。

「山手線」はそのものズバリの円環運動。「なんでもいいから／何かになりたかった」という、ハタチの頃に誰の心にも刺さっていた、抜けないトゲ。そんなトゲを抱え

込んだまま、山手線は円を描く。「秋葉原／欲望をつめこまれて破裂しそうな女の子／ぐにやり、」の3行は傑作だ。「錦糸町／欲望にきれいとか汚いとか／北口とか南口とか」からは、シェイクスピアのセリフも連想する。「何度でもほしい、／夜明け」のラスト2行に、切ない余韻が残る。夜と朝は繰り返し循環する。山手線も循環する。「わたしとあなた」も、あなたがわたしで、わたしがあなたで、循環していく。ここでの「わたしとあなた」は、わたしたちなのであって、作者プラス恋人、ではない。作者と読者、作者の中の複数の自我、読者の中の複数のペルソナ、などのわたしたち、として読みたい。

「底」では、自己嫌悪のメカニズムが端的に書かれている。

突き落とされた
ここは
じぶんがいちばん
よく知っているばしょだ
(略)
上の方で
突き落としたじぶんが
ばかと言った

ほとんどの女の子は、自分の穴にこもってうじうじしているのが好きだ。これは、答えのない循環ウジウジである。だって、でも、そうじゃなくて、やっぱり、と、ぐるぐると自分の尻尾を追いかける猫のように、循環するマイナス思考。そういう湿っぽい自己愛と自己嫌悪をごちゃまぜにしたものをいじくりまわす自分に対して、「じぶんが／ばかと言った」。作者の発想の転換速度は一瞬だ。ネガティブな心情の中から、ドライでスパッと割り切るもう一人の自分が、瞬時に視点を変える。「螺旋階段」と同じように、循環する円に対して、直線の切り込みだ。

「いい」という作品でも、ぐるぐる回る心理が短く書かれている。「楽しすぎて／今／終わってもいいや」「涙が／どンドン流れて」「ずっと／このまま／こんなふうなのかな」「何を／したいの」と、楽しい感覚の直後に感情の振り子が悲しさに向かって大きく振れ、さみしさを持て余し、あなた、あの人、などの他人を思い浮かべるが、結局は自分自身の心に問いかける。「何を／したいの」と。女の子の循環する心理だ。環境や状況のせいになしたり、揺れ動く感情を持て余したり、ゴミを捨てるみたいに衝動的に関係性を捨てなくなったり、臆病と衝動と自虐との間を循環していく。作者は、自分の心理を冷めた視線で手厚くキャッチしている。

「おっぱぶ2」は、おっぱいをめぐる時間が螺旋状に動いていく様子が描かれている。

ぱちんという大きな音を立てて
お祭りは終わる
(略)
日常からかけ離れて行く
はやさで
引き渡される
(略)
これは自分のおっぱいなのだから
どう使ってもよいのだ
と
(略)

アスファルトの下に
土が埋まってるなんて信じられない
(略)
ハイヒールのかかとを
すり減らしながら
(略)

女のおっぱいの位置づけは、生物学的母である機能と、男性からみた女性の性器の一部であるものとの、落差が大きい。女個人としては生物として同じ個体なのに、時間軸によってやってくる対象によっておっぱいの機能がまるで違うのである。時間が螺旋状に動いていき、子どもは男になり、男はまた子どもになり、それを繰り返しながら螺旋状に月日が進んでいく。おっぱいの本人である女は、埋まっている土があることをわかっていながらも、表面のアスファルトでハイヒールをすり減らしている。土はアスファルトに覆われ、またいつかそれが剥がされて土になり、また覆われる。ハイヒールはすり減り、新たなヒールになり、またすり減る。これも循環していく、性であり、生である。

死と生、性と生、分割とまじわり、これらが螺旋状に連なって時間が流れていく。作者は、生の重さを持って余しつつ、諦念ではない冷静さを持つ女の子たちの、おそらくは、自分や他者へ向かう怒りと紙一重の何かを捕まえているようだ。攻撃ではなく愛の姿に近いが受容ではなく、私には、苛立ちや姿の見えない怒りに近いように感じられる。怒りの向けどころがなくて絶望しないために、自分で自分を抱きしめるための詩集なのかもしれない。